

IV総合的考察

1. 保育の国際化を考える

日名子太郎研究員

はじめに

今回の調査の結果をふまえながら、日頃から気になっている、保育者への外国人保育対策に対する保育者養成、保育現場での対処の仕方について忌憚のない筆者の意見を述べてみることにする。この問題はきわめてわれわれ日本人の生来の性格、そして歴史とも関連があるので、少々、大回りの感もあるが、『鎖国』から始めることにしたい。

日本が周囲から孤立(鎖国)する政策を徳川幕府が300年もの長きにわたり実行してきたことは周知のことである。そして、それが何とか維持できたのは、船しか交通手段がなく、しかも周囲を海で囲まれた島国であることが幸い(?)したからである。しかし「大航海時代」を迎え、造船技術等の発達によって、夢の実現と黄金を求め、次第にわが国の周辺に外国船が出没しだすと、次第に開国への道が少しずつ外圧として幕府の政策もゆらぎだした。この間の事情については、著名な和辻哲郎による名著『鎖国』^(*)があり、この書のなかで和辻は、かなりはっきりと当時の事情を「日本の悲劇」と批判している。

開国の結果、わが国はいろいろな点で、とくに教育・行政あるいは科学的精神の欠如とその結果としての機械文明の進歩の遅れを認識し、その遅れを取り戻すために、これまた欠点である軽薄な追いつけ・追い越せ主義で急速な西欧化への道を歩みだした。幼稚園制度などもこの一環である。しかし、このような場合には、とくに日本人の生き方、ないしは精神面について考え、反省してみることが必要なのではないかと思う。なぜなら、日本人は明治以降において遅れを取り戻そうと努力し、たまたま日清・日露の両戦役によって国威を発揚したが、その結果、自力を過信しすぎて、先進国と摩擦を生じて、世界大戦となり、結果的には大損失を蒙った。

それにも関わらず、戦後またもや、今度は経済力を一時的には培ったが、またもやバブルの崩壊、経済の破綻、教育の崩壊、人心の退廃などという苦境を招いている。一体、何回繰り返せば気づくのであろうか?これは「愚」である。心理学的に言えば、日本人が潜在的に、無意識的に心に抱く「浅慮」なのではないのだろうか?その上、さらに悪いことには、これまでに日本人の培ってきた精神的に大切な「イキ」とか、「恥」といった美点まで喪失してしまったかに見える。

(*)和辻哲郎著『鎖国—日本の悲劇』岩波文庫 1982年(上・下)

(1) 外国人子弟の保育受け入れにおいて基本的に配慮すべきことは何か。前述したような過去を踏まえて、我々が近年になって、受け入れる外国人保育を実施する場合に配慮すべき点をいくつか指摘してみよう。

筆者はかつて「育児・保育を考える際に取り上げるべき要因」として次のような 10 項目をあげた (*2)。

- a. 身ぶり、動作、ことば、態度、礼儀・作法
- b. 食事のとり方、その身体への注意
- c. 住居、家具、什器などの様式
- d. 婚姻・親族関係の形式、相続の制度
- e. 世論、情報、報道などの形式、制度
- f. 国家組織・法律・政治・行財政、種族・社会・国家間の衝突における制度的形式
- g. 建築、絵画、彫刻、音楽、文学、演劇、舞踊など
- h. 労働、慰安、休養などへの関心と活動
- i. 宗教、哲学、呪術、占いなどに関する考え方と実際
- j. 神話、伝説、習俗、民話など

なお、このような選択は、「文化は、社会の全生活様式を指すものであって、その社会の中で比較的高尚であり、望ましいと見なされているような生活様式をさすものではない」(*3)とする考え方に準拠したものである。

さて、このように列記しただけでは、保育者の方には理解し難いと思うので少し部分的に例を挙げて説明しよう。前にも指摘したように日本人の気質には進取の気性という聞こえはよいが、新しがり屋で、周りを気にするところが少ない。また、古きを忘れがちである。例を挙げると、わが国のよい芸能の一つである「茶道」にしても本格的なお点前はともかくとして、その中に含まれている精神とか、礼儀・作法は日常の生活においても少しは心得ているほうが良いし、礼法にしてもこれまた、知っていて決して悪いことはない。この他、日常生活における挨拶状とか、年賀状、お礼状などについて知っていたほうが人間関係を潤わせるには大切な習慣である。また、手紙・封筒の宛名等の書き方などは心得ておくべきことである。

筆者は大学の保育内容「言葉」の講義も担当しているが、その際に夏休みなどの課題に「手紙の書き方」を含めていたが、卒業して保育現場に出てから非常に役だったと多くの教え子から感謝された。しかし、現場で他校の卒業生に聞くと、全くそういったことが言語と無関係のように考えている教授諸侯も少なくないようである。さらに、宗教関係の養成機関を卒業しても、ほとんど宗教のことについて学んでおらず、精神面についての指導をしていない場合が少なくないのは、その学校自体が最も大切な保育の基本を教えていないことになりかねない。

教職関係、保育士等の養成課程にしても、保育の専門知識・技術の学習に重点をおく前に、基礎教養に力を注ぐようにしないと本末転倒である。しかし、それも上手く保育内容と混合することによって理解しやすく外国人保育などの際にも大いに有効である。

日本人が邪教めいたものに誘われやすく、特に最近はその被害は後を絶たない。なぜ、すぐにそのようなものに引かれるのか、その責任の一端は、既成宗教にも全くないとは言いきれないのではないか。また、親の育児観、教育観とも大いに関係する。とくに宗教は外国人保育において

はイスラム教のように戒律も厳しく、またそれを厳守している人々も多いから研究を必要とする分野である。

また、仏教においても、大乘仏教のわが国と、小乗仏教の国とでは、色々と習慣も、形式も異なるから注意を要する。相手の信仰を十分尊重して対処しなければならない。

(*2)改訂『保育学概説』日名子太郎著 学芸図書 K.K. 平成 2、P80

(*3)ラルフ・リントン著、清水・大屋共訳『文化人類学入門』昭和 27、P47

(2) 外国人保育において保育対象となる国々について注意してほしいいくつかの問題点と、最初にどうしても留意してほしい項目を挙げておこう。

- (i) 生活様式・習慣…とくに儀礼、接待の様式や程度、対人関係
- (ii) 家庭・保育施設…親の家庭保育への認識度、保育施設についての認識と価値観
- (iii) 日本や日本人に対する感情…友好的・反目的・嫌悪の情の有無とその原因
- (iv) 宗教…仏教、キリスト教(カトリック、プロテスタント)、イスラム教(回教)などの宗教思想、祭祀、そして熱心度
- (v) 教育…制度、学歴に対する社会的価値観とそれらへの関心
- (vi) 経済・教育水準…どの位の差があるか、それによる個人格差

さて、この中のいくつかの項目について、わが国と筆者が現在参加している保育現場並びに周辺環境について比較して実際の例をあげてみよう(順序不同)。

a. 言葉について

まず、「言葉」について取り上げることにする。その前提条件として中国は巨大な共産主義国家であり、人口増大を防ぐため、「一人っ子政策」を採っていること、文字はすべて「漢字(含簡略字体)」で標記し、道路などは漢字と英字を列記してある。例えば、上海空港の一つである「虹橋空港」は、中国の地図では次のように記載されている。“<虹●国●机●>Hongqiao Airport”地名をこのような標記で読むこと自体が容易でない。これに対して香港の方は旧漢字体であるし、英語もある程度は通用する。便利そうであるが、上海は上海語、香港は広東語で容易には通じないし、さらに標準語といわれる北京語はまた異なる。日本保育協会が日本財団の助成で作成した『外国人保育の手引き』(中国語)は確かに便利であるが、北京語なので、日本に来ている福建省や上海市からの人には一部しか通用しないというほどに、言葉の問題があるから、現場では一体中国のどこから来た人で、親は何語を話すか、注意してほしい。では、中国人にとっては、漢字は良いとして、ひらがな・カタカナは、なかなか難しいようである(簡略字体については日保協機関誌『保育界』、8月号に述べてある)。

現地でも、内地でも日本人との結婚をしたがる中国女性が多い。その理由は言うまでもなく日本人の経済的な豊かさに原因するものが多いといわれるが、それによって、生まれる子どもの数へ

の制限が彼らの本土の「一人っ子政策」を無視でき、厳しくないこと、母親の両親も面倒が見られるといった理由からであるが、これは何も中国女性のみならず、他の国の女性の願望でもあるらしい。日本は現在確かに就職も厳しく、収入も減っているが、彼らの経済水準と比較すればまだまだ豊かである。

しかし、その場合に欠かせないことは日本語が話せ、書けるようになることである。したがって、保育の現場でも、この辺を理解して、言葉の教育に努力することが大切であるし、場合によってはその面だけの専任保育士も必要になると思う。

次に、生活水準を理解しておかないと相互理解に事欠くことになりかねない(この点については筆者が日保協機関誌『保育界』に連載した「中国南東部保育事情」(1998・7月号・半年間連載)を参照のこと)。

中国の1999年度における統計では、中国全体の個人一人当たりの収入を見ると次のようである。()内は、1元を13円として換算したもの。

1. 年収…都市部	5,859 元(76,167 円)	農村部	2,202 元(28,665 円)
2. 月収…都市部	488 元(6,334 円)	農村部	184 元(2,392 円)

ちなみに、現在、上海市内のLAWSONでは、

菓子パン類…@3~4元 おにぎり類…@3.5元 缶ビール…@3~4元

また、市内のタクシーの最初の料金は10元である。

なお、上記の平均収入は、中国全土で見ると、中国南部は高く、北部は低いとのことである。来日している統計も南北に分類することも必要であると思う。念のため書き添えると、現地での調査ではどうしても北部が多いということである。現場では、このようなことも頭にいれて、言葉、経済観なども考えるべきであろう。

b. 宗教について

さらに、中国の宗教事情についてふれると、共産政権のために、特に制限はされていないので、キリスト教会、仏教寺院などへ行くと、青年たちが、日本人よりも熱心に祈りを捧げ、線香の煙がもうもうと立ちこめているのも、考えに入れておいた方がよいと思う。

この他、宗教で問題になるのはイスラム教の信徒たちであろう。なぜなら戒律が厳しく、しかもわが国では比較的になじみのなかった宗教だからである。マホメットの教説と行為を中心として形成されたもので信徒総数は約3億以上といわれ、アラビア・トルコ・アフガニスタンからインドネシア・ロシア・モロッコにわたる範囲に普及している。その信仰と儀礼は、六信(神・天使・経典・預言者・来世・天命)の信仰と五行(信仰告白・礼拝・断食・喜捨・巡礼)でこれを実践するとされている。現場での給食その他については、これらについて親に説明を受けることが望ましい。また、宗教的戒律と園行事などが重複した場合、相手の選択に委ねるべきであろう。

c. 写真・ビデオ撮影について

わが国では行事あるいは見学(含む公開保育)などの際にビデオ、写真撮影をすることが多いが、とくに外国人子弟の場合とは限らないが、よほど注意して行事の前には予め一般の親に注意を促しておくことが大切である。筆者の体験では、これまでに訪れた外国の施設では、撮影を拒絶された場合の方が、むしろ多かったと言ってもよい。それは「肖像権」の問題である。移民などの多い国や地域では、その人々それぞれに事情があるということを配慮しなければならない。

(3) 外国人保育を行うにあたって、どうしても学ばなければならないことについて

a. まず己れのこと、つまり日本の歴史・文化についての学習

これは何も保育園に限ったことではなく、今日の日本人とくに若い人々すべてに提言したいことである。本文の冒頭部にも述べてあるように鎖国以来今日までのわが国の歩んできた道には数々の誤りがあり、しかもそれを何回も飽きることなく繰り返している傾向がある。外国人は、日本のことについて知りたいことが多く、関心も強い。逆に日本人はあたりしがりで日本の伝統文化も含めて無知に近いのは、もちろんわが国の親の考え方、進学中心の教育観といった方向へ直走りした結果によるものである。したがって、「温故知新」—古いものを理解し、その結果として新しいものに眼をむけること—という立場に立つことによって、まず古いものを十分に学び、大切にし、自国の歴史、文化について学び、その間に諸民族、諸外国とのふれ合い、関係などを知り、ついで新しいものへ関心を移すということが、ほんの形式的にしか行われていなかったということへの反省が必要である。

しかし、これを改善していくことは決して容易なことではない。保育者も現場にしながら、外国人とのふれ合いを通じて相手のわが国の伝統とか、考え方を理解させるために、再学習が必要である。つまり、保育技術、保育内容の根底となる教養を養うことが大切なのである。

b. 日本人は好かれているか?なぜ嫌われるのか?

この判定は容易ではないが、多分大方の日本人は好かれていると思っている人が多い。筆者は、多少立場が異なる。同じ施設で働く仲間の香港人たちと過ごしてきた頃のある年度のこと、私自身も退くので、お別れのパーティーで円卓の一角に座っていた。ちょうど隣の席に8年ほど仕事をしてきていたS女史がいた。日本語も上手く、慣れていたのでもっと続けてくれるのだと思っていた彼女が退くといささか困ると思いつつ慰留したが、育児を理由に辞めるとのことであった。そこで何気なく将来のことも含めて、「日本の会社?それもと香港の……?」と尋ねると、「香港人のところ……」と言い、激しい口調で「英国人嫌い!」と言う。私が重ねて「じゃあ、ここにいれば?」と問うと、「日本人もっと嫌いネ!でも、先生はちょっと違うネ!」、そしてその理由を詳しく説明してくれた。このような日本人観は、実はしばしば耳にしていたが、これもハッキリといわれるとショックであった。昨年の暮れ私どもの園舎が移転する時のこと、日頃通園バスに朝夕と添乗してくれる中年のおばさんたちが夜遅くまで働いてくれているので、「もうそろそろおしまいにしたら?」と声をかけたところ、「園長は?」ときくので、「私は皆がすんだらネ」というと、「では、わたしたちも続けます」と譲らない。ふつう中国人の場合にはなかなかこのようにはいかない。彼らの方が日本人化してしまっている

のである。卒園式の時、子どもたちの前でこのおばさんたちに「あなた方は仲間ですよ、また来年度もいっしょにネ!お母様方、この人たちが協力してくれるから、この幼稚園は成り立つのですよ」と挨拶したところ、彼らは大変に感動したようである。この仲間意識こそ外国人保育で最も大切な保育の心であると思う。私は来年こそ、おばさんたちやガードマンのおじさんたちに中国語で挨拶しようと心に誓っているところである。

しかし、あちらに出向している日本人の母親は、多くの場合、高い家賃(月額平均 40~50 万)の豪華マンションに住み、安い賃金でメイドさんを雇って、子どもの弁当まで自分では作ろうとしない。まるで、中国にいる間に一生分の贅沢をしてやろう!といった意気込みである。そんな日本人たちは嫌われるのである。

c. このような日本人独自の感覚が生まれるのか?それを補うための学習は?

これまでの日本人の生活観は、大江健三郎のノーベル文学賞受賞記念講演で彼の語った「あいまいな日本人」であり、石原慎太郎のいう「NO」と言えない日本人」にある行動パターンである。この点を是正していくにはどのような学習が必要なのだろうか?

(i) 保育者をもっと幅広い内容の教養学的学習が必要である。

極端に言えば、保育の専門知識よりもこの教養的学習の方が大切であるのに、保育者養成課程の内容と方法が専門に片寄りすぎているのである。教養的学習がそのまま保育につながるような講義が必要なのであるが、一体そんな教師が日本に何人いるのであろうか?二、三の例をあげておこう。大江健三郎の「あいまいな日本人」の中に同じくノーベル賞受賞であるセルマ・ラーゲルレーヴ女史の『ニルス・ホルゲルソンの不思議なスウェーデン旅行』(1906~1907年)^{(*)4}が登場している。

本書はもともとスウェーデンの地理・風土と子どもたちに「愛と勇気」を考えることを目的として著わしたものである。

また、有名な『星の王子様』は、第二次大戦末期に、ナチス・ドイツ戦闘機に撃墜され、地中海に散ったサン・テクジュベリにより書かれた旅、愛、死、子ども時代への回帰を主題にした児童文学であるが、彼は別に『南方飛行』『夜間飛行』などを著わしている^{(*)5}。このような本を読むだけでも視野が広がるし、世界と触れ合える。

韓国との江戸時代における関係などは藤沢周平著『市塵』^{(*)6}は、徳川時代の碩学新井白石の伝記であるが、かなり詳しく述べている。

以上は文学についてであるが、絵画の世界はいかがであらうか?次のスウェーデンの絵本『リネア=モネの庭で』は、少女リネアが睡蓮の絵でも有名な絵画のモネの紹介をしているものである^{(*)7}。またフィンランド生まれのトーベ・ヤンソンによる『ムーミン谷への旅』はフィンランドを絵と写真で紹介した絵本で大人にも楽しいものである^{(*)8}。

読書によって保育と無関係に見える世界がつながるのである。また、最近では東京のみならず地方都市においても美術館が開かれ、世界の有名な作品が直接鑑賞できる時代になった。名作を

鑑賞することは絵画への心をひらくきっかけになり、子どもの絵を見る目も進歩してくる。有名なピカソが、彼の絵画へのヒントを小さな子どもの落書きから得たということもありうることであろう。

(*4)『ニールスの不思議な旅』香川鉄蔵・山室静・佐々木基一共訳(学陽書房刊)、他に抄本や絵本あり。1949年

(*5)サン=テクジュベリ著『夜間飛行』堀口大学訳 新潮文庫(これに『南方飛行』も併含されている) 1993年

(*6)藤沢周平著『市塵』(上・下) 講談社文庫 1991年

(*7)クルスティーナ・ビョルク、レーナ・アンデンション著『リネア=モネの庭で』福井美津子訳 世界文化社

(*8)『ムーミン谷への旅=トーベ・ヤンソンとムーミンの世界』講談社

(ii) この他に欠かせないのは音楽であろう。

かつて、筆者が開いていた統合保育施設(昭和23~43年)では、毎朝の集会の際に先生が交代で子どもたちにお話をしていたが、私は一回一枚紙芝居を毎週連続でやり、その年の運動会のテーマにこの紙芝居を取り上げることになった。そのテーマが『ニールスの冒険』であった。いろいろ討議の上、では音楽は?ということになり、あげくの果てに、私がリムスキー・コルサコフ作曲の交響組曲『シェエラザード』を提案したところ、誰一人聴いたことがないという。そこで私物のLPを聴かせて、無事運動会を終えた。それに全く意外なことに20%混入している障害児たちが、この曲に魅かれて行動したことである。これは新しい発見であった。

(iii) 最後に、気質や趣味そして教養についてを取り上げておく。

民族、国家によって大きな違いのあることに驚かされる。有名な英国の作家サマセット・モームの作品には、われわれとは大幅に異なる彼らの人生観がよく描かれている。例えば、放浪の末、タヒチに渡り、一生を終えた世界的巨匠ポール・ゴーギャンをモデルにして書かれた『月と六ペンス』(*9)や、幾多の短編の中には英国人氣質が躍如としている。

いま一つ例をあげると、こんな国と共通の考え方もあるという部分を、同じ英国人の作家で、推理小説界で何回も賞をとり、それをTVドラマ化したものをNHKで放映するとされ、大いに期待しているコーリン・ディクスター原作『森を抜ける道』の中に、教育崩壊の原因として、警察、両親、教師、教会、景気後退、失業、青少年施設の不足、自動車会社、TV、酒類醸造業者、左翼的ソーシャルワーカー、右翼的ソーシャルワーカーをあげている部分がある。わが国でいわれているものとあまりにも類似した見解なのでおどろかされた。この著者であるディクスターは、ケンブリッジ大学卒業。現在オックスフォード大学に迎えられ、かたわらクロスワードパズル作りの名手として知られている。英国もかなり試験制度のうるさい国であるので、この類似点はなかなか興味がある。

このような日常生活における趣味や教養的学習が、多角的な角度で保育に作用するのである。偏差値とか、入試とかに奔走しているより、日常生活を豊かにして、そこから保育をひきだしてい

ると、諸外国の人との関係も、また彼らの世界とも自ずと緊密なきずなで結ばれるということをお伝えしたい。

(筆者は聖徳大名誉教授・上海市教育委員会諮問委員
OISCA 上海幼稚園長・香港幼稚園顧問)

(*9)『月と六ペンス』世界文学全集(18)所蔵 阿倍知二訳 河出書房新社 1966 年
『カジュアリーナ・トリー』 ちくま文庫 中野好夫・小川和夫訳 1995 年
『アー・キン』 ちくま文庫 増野正衛訳 1995 年